



姫山



川崎ゆきお

宮田は姫山について書かれたテキストファイルを読んでいる。部下が書いたもので、観光PRに使うものだ。

この地方の豪族の城、実際には土塁と杭囲みの砦程度のものだが、それが落ち、姫は城から落ち延びた。そして、逃げ込んだ山で身を隠し、数日後、家来に助けられた。それからは姫山と呼ぶようになり、今でも地図に載っている。

そういう内容の文章だ。

宮田はそれを書いた部下を呼んだ。

「いいんだけどねえ。物語性があるって」

「そうでしょ、この村独自のものです」

「いいんだけどねえ」

「何か」

「他の山にしないかな。紹介は」

この村近くには名の付いている山は無数にあるが、どれも平凡だ。形が変わっているわけではなく、山地の瘤のようなものだ。姫山もそれに近い。

「そのお姫様達がいた豪族の城跡はどうなの」

「それが、場所がよく分からないのですよ。城と言っても住むような場所じゃなかったようです」

「石垣とかは」

「ありません」

「城の名前は」

「安国城となっていたらしいですが、その豪族がその後、どうなったのかは分かりません。その子孫もよく分かりません」

「面倒だね」

「何がですか？ 安国城に触れてはいけないような何かでも」

「いやいや、安国城が暗い方の暗黒城なら面白いのだが、僕も初めて聞いたよ。この町の生まれだけど、あの村のことはよく知らなかった」

「おそらく、住民も入れ替わっていると思います。室町時代ですので」

「お姫様は家来に救い出されたけど、その後の消息はない。どうなったの」

「分かりません」

「じゃ、お姫様が隠れていた山地という程度でしょ。しかも安国城の位置も分からないし、その豪族が何者だったのかも分からない」

「まあ、そうなんですけど、この村の特徴と言え、それぐらいで」

「普通の山でいいんじゃない」

「と、言いますと」

「特徴があるのはいいんだけど、説明が面倒だし、聞く側も面倒だろう。だから、村人がよく立ち入った山とか、木を植えて、木こりが伐りに行ったとか、猟をしたとか山菜を採ったとか、そういう普通の山がよろしい」

「でも、観光としての特徴が」

「まあ、普通の農家が、しかもそこそこ古い農家が残り、普通の山に囲まれた場所でいいんじゃない」

「そうなんですか」

「特徴を出そうとするから、お互いに苦しいんだ」

「お互いとは？」

「作る側も見る側も」

「はい」

「それに、ありふれているほうが乗せやすい」

「え、何に乗るのですか」

「一般的な山、一般的な村のほうが、分かりやすいんだ。だから、イメージを乗せやすい。方向性を与えない方がいい」

「でも、いい名前が付いているのに」

「まあ、姫山にお姫様のイラストを入れる程度でいい。山の説明はいらない」

「はあ」

「姫山だけで、それぞれ色々想像する。その方がいいんだよ」

「はい、分かりました。では、この文章、使いません」

「他のスポットもそうだよ。特徴や特色、オリジナリティーを出さないこと。いいね」

「逆なような気がします」

「出し過ぎなんだよ。そういうの。だから、何も無い方がすっきりしていいんだ。実際、この町はそうなんだから」

「はい、分かりました」

了